

# 音楽部会 研究の構想（案）

平成30年度～

## I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

## II 主題設定の趣旨

平成26年度からの4年間は、「音楽に対する感性を育て、豊かな情操を養うにはどうすればよいか」を研究主題とし、①〔共通事項〕を支えとした指導計画の作成、②〔共通事項〕を支えとした学習指導の工夫、③学習評価の工夫の三つの視点を中心に研究してきた。その結果、ねらいに即した指導計画及び学習指導が工夫され、ホワイトボードやICTを活用したり、学習形態（ペア・グループ学習等）を工夫したりした授業づくりが活発に行われた。〔共通事項〕を支えとすることは音楽科教育の根幹であり、今後も引き続き研究を進めていきたい。

さて、新学習指導要領の音楽科の目標では、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定した。また、「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」としている。これは、音楽科の特質に応じて物事を捉える視点や考え方であり、生徒にとって音楽を学ぶ意義の中核をなすものであるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」を実現する鍵となるものである。

その上で、音楽科が育成すべき資質・能力については、(1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。（生きて働く「知識及び技能」の習得）(2) 音楽表現を創意工夫することや音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる。（未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成）(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養）の三つの柱に再整理された。

そこで、平成30年度からの3年間は、改訂された目標の趣旨を踏まえ、上記の三つの柱に基づき、その主題解明に向けて研究を進めていきたい。

## III 研究のねらいと内容

### 1 研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するため、これまでの研究成果や課題を整理し、生徒の実態を踏まえながら、3年間の継続的な研究を通して研究主題を解明する。

### 2 研究内容

#### (1) 指導計画作成の工夫

- ・資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の作成
- ・小学校や前学年までの学習を踏まえ、3学年間を見通した指導計画の作成
- ・〔共通事項〕の適切な位置付けと、〔共通事項〕を要とした各領域や分野の関連

#### (2) 学習指導の工夫

- ・「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実
- ・音楽科の特質に応じた言語活動の充実
- ・協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫
- ・音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導の工夫
- ・様々な感覚を音や音楽と関連付ける指導の工夫

#### (3) 学習状況を記録に残す場面と指導に生かす評価の工夫

- ・目標に即した評価の適切な場面や方法の設定
- ・生徒が学びを実感できる評価の工夫
- ・PDCAサイクルの構築を目指す評価の工夫
- ・生徒の思考過程が記録できる評価の工夫

# 音楽部会 令和2年度研究計画（案）

## I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

—育成を目指す資質・能力を明確にした学習指導と評価—

## II 主題について

昨年度までは、授業のどのような場面や方法で学習指導を工夫すれば、より生徒自身が「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習活動を行うことができるのかに焦点を当て、生徒の姿を具体的にイメージしながら研究を進めてきた。授業において、一連の学習過程の充実、協働的な学習の場面の設定や学習形態、音楽科の特質に応じた言語活動の位置付け等、研究主題に迫る工夫が見られた。しかし、「音楽的な見方・考え方」を働かせた学習活動の工夫ばかりに目が向き、何を身に付けさせたいのかを明確にし、どのような力が身に付いたかを評価することについては、研究が不十分であった。授業の根幹である資質・能力の育成に焦点を当て、何をどのように育成するのか、それをどのように評価するかという点について、さらなる充実が求められる。

さらに、新学習指導要領に基づき、3つの資質・能力を①「知識・技能」②「思考・判断・表現」③「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で評価していくことになる。「知識」については、曲想と音楽の構造等との関わりについての理解の状況を評価し、「技能」については、創意工夫を生かした表現をするために必要な技能の習得の状況を評価する。「思考・判断・表現」については、音楽を形づくっている要素の知覚・感受、また、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている状況や、思いや意図をもつ過程や結果の状況を評価する。「主体的に学習に取り組む態度」については、本題材の学習内容等に関心がもてるようにしながら、各時間の学習活動に粘り強く取り組んでいるか、また、本題材の目標の実現に向けて、自己の学習を調整しようとしながら取り組んでいるかなどについて継続的に評価し、適切な場面で総括的に評価することが求められる。

これらを踏まえ、今年度は研究の副題を「育成を目指す資質・能力を明確にした学習指導と評価」とした。まず、題材ごとに教師が育成したい資質・能力を明確にする必要がある。そして、それに適した教材を選び、教材にある生徒の思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素を読み取り、活動内容を構成していく。そして、どのような力が身に付いたかを評価し、指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることが大切である。

## III 研究内容とその視点

### 1 指導計画作成の工夫

- (1) 育成を目指す資質・能力を明確にした、指導計画・指導案を作成する。
  - ・ 3学年間を見通した指導計画は、題材等内容や時間のまとまりを考慮し、小学校や前学年までの学習を踏まえて作成する。
  - ・ 学習の見通しや振り返りを通して、自身の学びの変容を自覚できる場面を設定する。
  - ・ 対話によって自分のイメージを広げたり、思いや意図を深めたりする場面を設定する。
  - ・ 学びを深めるために、生徒が考える場面と教師が教える場面をバランスよく設定する。
- (2) 〔共通事項〕は、表現及び鑑賞の学習において、十分な指導が行われるよう適切に位置付ける。その際、必要に応じて、〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図る。

## 2 学習指導の工夫

- (1) 「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実を図る。
  - ・ねらいを明確にし、学習課題を明示するとともに、終末ではその時間の学習課題の達成が実感できるようなまとめの活動を行う。
  - ・思考、判断し、表現する一連の過程を大切にしたい板書や発問、ワークシート等を工夫する。
- (2) 音楽科の特質に応じた言語活動を位置付け、音や音楽によるコミュニケーションの充実を図る。
  - ・音や音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図等を相互に伝え合う活動と音や音楽で伝え合う活動をバランスよく融合させる。
  - ・実際に音や音楽で表現したり、聴いて確かめたりするなどして、言葉で表したことと音や音楽との関わりを捉えられるよう指導を工夫する。
- (3) 知覚・感受したことを、他者と共有したり共感したりする協働的な学習の場面を設定するなど、主体的・対話的で深い学びにつながるよう学習形態を工夫する。
  - ・ねらいに即したペア・グループ学習を効果的に取り入れる。
  - ・適宜、自由な身体表現等の体を動かす活動を取り入れる。
- (4) 音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫する。
  - ・自然音や環境音等について取り扱い、音環境への関心を高める。
  - ・取り扱う教材と学習内容とを適切に関連付ける。
  - ・音楽が果たす役割を感じ取ることのできる教材を適切に選び、それを考えさせる授業を行う。
  - ・学びを学校内外の音楽活動に生かす場面を想起したり、振り返ったりする活動を取り入れる。
- (5) 様々な感覚を関連付けて音楽への理解を深められるよう指導を工夫する。
  - ・思考の流れを可視化するとともに、様々な感覚と関連付けて捉えることができるようICTを活用する。

## 3 学習状況を記録に残す場面と指導に生かす評価の工夫

- (1) 育成を目指す資質・能力を明確にし、各題材や各時間に位置付け、適切な場面、方法で評価を行う。
- (2) 生徒の学習状況を常に把握し、それを基に学習を充実させていくといった指導に生かす評価を行う。また、指導に生かす評価と関わらせながら、評価基準に基づき、評価の結果を記録に残す場面を適切に位置付ける。
- (3) ICT等の活用やワークシートの工夫を図り、授業の中で、計画的・継続的に行い、生徒の思考が深まっていく過程が記録できるようにする。
- (4) 生徒による自己評価、相互評価を行うなど、生徒が学びを実感できるよう評価の方法を工夫する。
- (5) 学習指導の在り方を見直すことや、個に応じた指導の充実を図ることのできる評価のPDCAサイクルを構築する。

## IV 研究方法

- 1 新学習指導要領等を確認し、一層の理解を図る。
- 2 各郡市内や郡市間での研究体制を整え、日々の授業実践を基に、協同研究を推進する。
- 3 校区小中学校間での連携を図り、生徒の実態を踏まえた研究の推進に努める。
- 4 教師自身の感性を磨き、指導力及び授業の分析・考察する力の向上を目指して積極的に研修を行う。
  - (1) 様々な研修会等に積極的に参加し、目指す資質・能力を育成する方法や技能をより一層磨き、教師力を高める。
  - (2) 授業や評価に関する技能向上のため、充実した学習会や協議会を企画・運営する。
  - (3) 授業に関する資料を持ち寄ったり、新しい教材の紹介や地域の人材に関する情報交換を行ったりするなど、教師間の連携を密にする。

